わが青春つきるとも

伊藤千代子の生涯

増補新版・原作「時代の証言者 伊藤千代子」
藤田廣登（学習の友社・刊）
製作：映画「伊藤千代子の生涯」ゴーゴービジュアル企画

桂 壮三郎 監督作品

chiyoko-cinema.jp

竹下景子
（安井てつ）

窪塚俊介
（浅野 晃）

金田明夫
（土屋文明）

新人・井上百合子（伊藤千代子）

石丸謙二郎
（特高）

嵐 圭史
（老人）

7月29日（土）

13時30分～15時05分

ラポルテ五泉 多目的ホール

今から90年余前の戦争前夜ー
伊藤千代子が市谷刑務所に収監された同時期、五泉市中川新出身の原菊枝（父親は当時村の小学校校長）も官憲に捕らえられ、お互いに励ましあって獄内で闘っていたと、原菊枝が後に「獄中記」で記しています。原菊枝も、勿論映画に登場します。

後援 五泉市

2020年9月に開催した映画「伊藤千代子の生涯」上映運動支援のための「新潟県・サポーターの会」設立集会時点での

呼びかけ団体

- 新潟県労働組合総連合
- 新潟県民主医療機関連合会
- 国民救援会新潟県本部
- 新日本婦人の会新潟県本部
- 新潟県生活と健康を守る会連合会
- 新潟県商工団体連合会
- 新潟日報労働組合
- 日本共産党新潟県委員会
- 治安維持法犠牲者国賠同盟新潟県本部

呼びかけ人

- 中村洋二郎・弁護士
- 土屋俊幸・弁護士
- 松井良枝・ワタゲ広場主宰
- 井上経久・新潟シネウィンド支配人
- 藤野豊・敬和学園大學教授
- 金子修・弁護士
- 五十嵐尚子・声楽家
- 高橋武昌・小さな美術館季館長
- 赤井純治・新潟大学名誉教授

入場料 1000円　上映時間 2時間5分

問い合わせは 渡邉 080―3523―9957

上映会のご案内

この度、県内各地の実行委員会が主催して映画「わが青春つきるとも一伊藤千代子の生涯」の上映会を行うことになりました。伊藤千代子が生きた１００年前は、多くの国民は貧困と無権利状態におかれ、アジア・平洋戦争の拡大とともに、治安維持法による思想や言論への弾圧がまかり通っていました。こうした暗黒の時代のなか、千代子は決して志を曲げることなく、命を賭して「侵略戦争反対」「主権在民」「男女平等」を掲げ、たたかい抜きました。そしてそれらの主張は戦後、憲法のなかに見事に結実しました。

しかしいま、その憲法を変え、この国を再び戦争する国へとつくりかえようとする動きが強まっています。千代子たちが願った「貧困の撲滅や公正な社会」に逆行する事態も広がっています。

私たちはいま改めて、この映画を通じて、千代子の生きた時代を振り返るとともに、千代子の生涯に学び、その志を引き継いでいきたいと願っています。

映画『わが青春つきるとも一伊藤千代子の生涯』を成功させる新潟県実行委員会

１００年前、権力に抗した一人の少女に、今私たちは何を感じるのか《ものがたり》

撮影を前に千代子の墓所をお参りする主演女優・井上百合子さん

「朝から晩まで働いても、満足にご飯が食べられない貧しい人たち、一方では贅沢をしている人たち。この不公平な社会をなんとかよい社会にしたい…」

時は明治・大正末期から昭和初期の激動の時代。天皇の絶対的専制政治のもと、国民は「天皇の臣民」とされ、貧困と無権利状態におかれていました。

千代子が東京女子大で学ぶ頃、稀代の悪法「治安維持法」が公布され思想言論弾圧がますます激しくなります。

千代子は、故郷の長野で製糸工場の大争議を通じ、労農党の浅野晃と知り合い、結婚。大争議を浅野とともに支援します。

そして日本共産党と共同戦線を組んだ労農党が初の総選挙で大躍進。その躍進を恐れた支配層は１９２８年３月１５日の大弾圧を加えます。千代子は検挙され激しい拷問を受け刑務所に送られますが屈せず、獄中のリーダーとして侵略戦争に反対し、主権在民、ジェンダー平等の社会を目指して志を貫きました。

しかし、同志であり最愛の夫である浅野晃の変節と裏切りを知り、非人間的な刑務所での扱いもあって千代子の身体と精神は徐々に蝕まれていくのでした…。

弁当分け合う 心優しい千代子さん

諏訪高女で土屋文明の薫陶受けて育った伊藤千代子は、卒業後の代用教員時代、凶作や繭・生糸の暴落で弁当を持参できない児童を励まし、教室で弁当を分け合って食べていました。職員室にほとんど戻りませんでした。

『婦人論』読んで ジェンダー平等へのめざめ

「女が勉強して何になるか」という風潮の中で、向学心に燃えた千代子は、諏訪高等女学校を目指します。仙台・尚絅女学校では自由・平等の新しい社会思潮にふれ、そして臨んだ東京女子大でベーベルの『婦人論』に出会い、「これだ」と感動した千代子は、郷里の友に書き送る・・・（1925年12月発信の手紙から）「女の人が覚める時、男子の催眠術から、そして自己の自己に対する催眠術から覚める時、どんなにすばらしい世の中が展かれて来るでしょう」

小林多喜二と伊藤千代子 時代が結んだ青春

1928（昭和3）年、日本で初めて25歳以上の男子のみの普通選挙が行われました。このとき、伊藤千代子は、北海道から出馬する労農党の候補者山本懸蔵の選挙出立資金を用立て、活動に参加していきました。

小樽では、待ちに待った小林多喜二らが「われらの山懸」を迎えてたたかいの火ぶたが切られました。選挙応援の機会が巡ってきた多喜二は羊蹄山の麓へと吹雪をついて突き進みました・・・。「俺たちの運動は何代がかりだなあ」・・・（小林多喜二『東倶知安行』より）。

同時代に、小林多喜二と伊藤千代子は目に見えない糸で結ばれながら、社会変革への息吹を胸一杯に吸うのでした。

二人が、もし特高警察の弾圧で生を絶たれなければ、どんなに素晴らしい人生を切り拓いていったことだろう…。